

佳作

小さい頃と今の考え

六本木中学校 佐々木 清香

私は今年の夏、ガールスカウトでキャンプに行った。もう七回も行っている。今回初めてキャンプを経験する一年生たちは、「虫がたくさんいる」「キャンプ場嫌だ」「早く帰りたいよ」と言いながらギヤーギヤー騒いでいた。今では、「大丈夫だよ」と言える立場にいるが、実は私も小さい頃はその子達と同じだった。

初めてキャンプに行ったのは二年生の時だ。

三泊四日という長い間、キャンプをして正直泣きそうになった。キャンプ場にはたくさんの虫がいて、お風呂に行くときや着替えているときなど、何かしているときは必ず虫と一緒にいた。特に、朝ご飯や夕飯などのご飯の時間は最悪だった。

私たちが普通にご飯を食べていると、デザートに甘いにおいをたどっている虫が来た。ハエや蚊ならまだ小さいからみんな我慢できたのだが、耳元で「ブーン」と言っている横を通り過ぎる蜂は嫌だった。蜂はニセンチ位のズメバチ。スカウト全員が耳をふさいでいるため、ご飯が進まない。そのせいで時間もどんどん過ぎていき、タイムスケジュール通りに行動できなくて楽しい時間が削られていた。

そんなこともあり、いつも「なんで蜂がいるの？嫌だな」と思っていた。違う国に行けばいいのと思うくらい、虫がとてもしやだった。だが小学六年生になって、私は今までの自分が悪いことに気がついた。

気づいたこと、それはガールで行ったキャンプ場は元々蜂やハエなどの虫たちが住んでいた場所だということ。そこを私達人間がキャンプ場のように、人が住める場所にしたのだから虫がいて当然だ。また私達人間が虫をつぶしたりするのも、虫の方だって嫌だろう。私が虫だったら、今の私のように「なんで人間に嫌がられないといけないのだ。こつちが先にいたのに。」と思うだろう。

考えてみれば、虫のせいにするのもおかしい。さつきも言ったように、キャンプ場は元々虫の住家。その場所を私達に変えてしまったのだから、虫がいるのは当然だ。それなのに「邪魔呼ばわり」しているのはひどい。虫の方がそこにいるのは長いのに追い出すみたいにするのは最悪だ。

このように考えた人は他に何人いるのだろうか。たとえ、小さな生き物でも命がある。その命をたくさんつぶしていることを知っているのは数人しかいないだろう。私はもつとたくさんの人に知ってもらいたい。小さな虫であっても命はあるのだということ。